

## 総評

2023年度より開始した日本膜構造協会賞の第3回目の公募及び受賞者選考を行った。公募は膜構造デザイン賞、技術賞、環境貢献賞の3つの常設賞を基本として発足したが、今回は2025年の大阪・関西万博で多くの仮設パビリオンが建設されることが期待されたため、特別賞の枠を設けて、4つの賞の枠で公募し受賞者の選考を行った。

本賞は開始当初より、常設3賞に対し、技術や環境に特段の貢献が無い限り仮設の膜構造がエントリーできる枠が無いことは明らかであったが。しかし、仮設の意義や評価のポイントなど、共通認識の確立に時間がかかるため、まずは仮設の受賞枠は無い状態で発足している。今回は万博施設で設置期間が半年間という共通の設置条件や設置意義などがはっきりしているため比較が可能ということで、大阪・関西万博に用いられた仮設施設のみを対象とした枠を、特別賞（EXPO2025）として設けることにした。

選考は、常設3賞は学識経験者4名を含めた6名の表彰委員で審査し、環境関連専門家のオブザーバー1名にも加わって頂き意見を伺った。特別賞は学識経験者5名の審査委員で実施した。

今回の応募件数はデザイン賞3件、技術賞2件、環境貢献賞2件、特別賞15件であった。これに対し書類審査(一次審査)の後、現地審査(デザイン賞3件)、オンラインによるプレゼンテーション審査(技術賞2件、環境貢献賞1件、特別賞11件)の二次審査を実施した上で厳正な審査を行った結果、デザイン賞2件、技術賞1件、環境貢献賞該当なし、特別賞6件の受賞者を選出することとなった。

発足3年を経た時点で気が付く点として、やはり仮設に類する膜構造が技術賞や環境貢献賞にエントリーしている傾向があげられる。もともと仮設膜構造に対する顕彰は懸案となっているが、これらのエントリーには芸術性の高いものや、町おこし活動に関連したもの、学生の短期のパビリオン制作など様々なものがある。このような作品や技術、取り組みに関して、日本膜構造協会としてどのような顕彰の形態がありうるか、現在、議論を積み上げている状況である。

表彰委員長 川口健一